

ひとむれ

二〇二二年十一月号

卷頭言

校長 清澤満

緑の山々が黄色や赤茶に染まる頃から森の学校にはたくさん落ち葉が舞い、礼拝堂に続く路や、本館や寮舎に伸びる生活道路を覆い尽くします。子ども達と職員は黙々とそれを掃き集めますが、何日もしないうちに又落ち葉が道路を埋めてしまします。積もった

落ち葉を再びみんなで掃いて集めます。この時季よく見られる作業の風景で、まるで我慢比べのように根気強く何度も何度も繰り返されます。集めた落ち葉は堆肥にして土にかえます。作業に無駄はありません。

それにしても本校の子ども達は実によく働きます。一つには、全ての作業に意味があることを教えられ、やってみることでその真実を知るからです。子ども達は毎日の朝作業に

夕作業、週三日の作業班学習と忙しい毎日です。時々文句が口を衝いて出ても頑張っ取り組んだ結果、今まで味わったことのない達成感を覚えたり、自分の成長や変化を実感できることがもう一つの大きな理由です。

「よく働くこと」。校祖の留岡幸助先生は、「能(よ)く働き、能(よ)く食べ、能(よ)く眠る」ことが少年達の教育に欠かせないと説かれ、これを感化教育の『三能主義』と称

されました。

大正四年七月発行の機関誌「人道第一二三号」に校祖が書かれた『三能主義』という文章が社論として掲載されています。その文末には、「北見国上湧別サナプチ恵の谷に於て六月十日夜脱稿」と付記されていますので、大正三年に社名淵の原野に鋤を入れたおおよそ一年後のこの地に於いて書き上げられた文章のようです。少し長くなりますが、校祖がど

のような考えから『三能主義』を唱えられたのかを知る上で必要と思われる所を抜粋してご紹介します。

* * *

吾人が多年実験し来りたる感化教育は、少年をして能く働かしむると共に、能く食はせ、而して亦能く眠らしむるにありき。この三要件は啻（ただ）に少年を教育するに於て必要なるのみならず、凡（すべ）ての人類を教育

するに於ても亦誠に必要欠く可からざるものなり。吾人はこの三事を称して基礎的教育と云はんとす。家屋を建築するには先づ礎（いしずえ）を据へざる可らず。其如く人の子を教育するに於ても、又礎なかるべからず。抑（そもそ）も礎とは吾人の既に述べたる勤勞、飲食、睡眠の三事なりき。吾人は之を称して感化教育の三能主義となす。（中略）

第一 勤勞 何故に彼等少年をして勤勞せ

しむるかと云ふに、彼等は概して怠惰放逸に日を送り時を移（ついや）すを以て其常となす。（中略）然らば即ち彼等は絶対に仕事を忌避せるものなりやと云うに然らず。之を教え、之を導くものあらば彼等と雖（いえど）も喜んで勤勞するに至るや必せり。凡（およ）そ人をして有用の器たらしむるは人の為、世の為になる仕事を教ふるにあり。有益なる仕事なくんば、有益なる人たる能（あた）はず。

(中略) 人は勤勞によりて満足を感じずるものにて、勤勞は取りも直さず幸恵なり。然れば少年を有益なる勤勞に結び付くるは、感化教育の要義にして、少年にかゝる状態を継続せしむるに於ては、感化は則ち其内にありと云うべし。(中略) 感化事業の泰(たい)斗(と)ズイ、アール、ブロックウエーの主管したる『エルマイラ』感化監獄を称して『忙蜂』BusyBeeと称したるも畢(ひつ)

竟(きよう)之(の)が為(ため)ならん。

第二 飲食 人生の悲惨一にして足らずと
雖も、生命ありて、食するものなき程悲惨な
るはなく、食あるも胃(い)囊(のう)を充

たすに足らざる程悲惨なるはなし。是を以て
聖人の教を立つるや、食を以て生存の根底と
なす。(中略) 飲食充実するも勤勞しめずし
て其の美味を感じしむる能はず。畢竟するに
食物そのものゝ美味不美味は勤勞によりて左

右し得らるゝものなるを信ず。能く勤勞か
しめて後食せしむること感化教育の妙諦と謂ふ
べし。(中略)食に満足せしむるは心に満足
を與ふるの一步にして、満足したる心理に徳
義の種子を下ろさば、臙(やが)ては発芽生
長して以て実を結ぶに至るべし。能く働かせ
て能く食はしむるは之あるが為なり。

第三 睡眠 睡眠の活動に欠く可からざる
は之を天然の状態に考察するも明かならん。

(中略) 四季を区別すれば自然は春夏秋に勤
労きし、冬季に於て眠れるなり。その眠るや、
やがて来ん春に於ける活動の下準備にして、
この眠りなければ春の活動は望む可からざる
なり。人も又天地と同じく活動を望まば豊か
に眠らざるべからず。(中略) 勤労て食ひ、
食ひて勤労かば、其結果や眠らざるべからず。
勤労に伴うの眠(ねむり)は、恰(あたか)
も水の卑(ひく)きに就くが如きものにて、

眠らざらんと欲するも得可らざる也。吾人はこの意味に於ても亦少年に勤労を勧むるものなり。（中略）

吾人は従来人生の三福を唱道し来りたるものなるが、その三福とは勤労、飲食、睡眠を適度にする事なり。能く働き、能く食らい、能く眠らするは感化教育の真谛にして、この三者を習ひ性とならしむるに於て少年は感化せらるべく、性情は矯正せらるゝなり。吾人

之を称して感化事業の三能主義と云ふ。（以下略）

* * *

文意を正しく読み取れていない部分がある
かもしれませんが、校祖は、この文章の冒頭
で「勤労・飲食・睡眠」という三要件は少年
の教育にだけ必要ということではなく、全て
の人の教育において必要なことなのだと述べ
ています。「能く働き、能く食べ、能く眠る」

ことは人としての基本であり、何事においてもまずその基本が確かでなければならぬというのです。

そこで、「勤労」に関して感化教育の対象となる少年をみると、一般的に怠惰な日々を送っている者が多いけれども、決して働くことを避けている訳ではなく、仕事を与え教える者がいれば、進んで働くようになること述べています。また、人というものは働くことで

満足を得られるものなので、働けるといふことは有難いことであり、だから、少年を良い仕事に導くことは感化教育に不可欠だとしています。

「飲食」については、生きていても食べる物が無かったり、充分食べられないことほど悲しく惨めなことではなく、人は食べなければ生きられないとした上、たとえ食べる物がたくさんあってもその美味しさは働いた後のほ

うが強く感じるもので、感化教育においては一生懸命働いた後に食事をするのが美味しく食べる秘訣と言えるところです。そして、満足な食事は心を満たす第一歩であり、やがては果たすべき義務や義理を守る人間に成長していくものだと述べています。

「睡眠」については自然を観察していても明らかのように、春夏秋は活動し、冬は次にくる春の活動に備えて眠っている季節であり、

人も同様、活力を得ようとするならば十分な睡眠を取ることが必要だとしています。働いて食べる、食べて働くことを繰り返せば眠くなるもの。よく働いた後は深い眠りが得られるもので、そういう意味でも少年には働くことを勧めるのだと述べています。

こうしてみると、校祖は「勤労・飲食・睡眠」という三要件をそれぞれ独立したものと捉えているのではなく、相互に関連付け

た上で『三能主義』としていることが分かり
ます。三要件が揃うことで必要が満たされ、
どれ一つ欠けても少年達の生活としては不十
分なのです。

校祖は特に「勤労」を重視されています。
私達人間にある「食欲」、「睡眠欲」といっ
た生理的な欲求を、「能く働く」ことによつ
て良質な「飲食」や「睡眠」として得る。一
生懸命働いた後の食事は美味しく、また、深

い眠りが得られません。良質な睡眠が得られた翌日の目覚めは良く、気力や活力が高まることは私達もしばしば経験することです。それが又「能く働き」、そして「能く食べ、能く眠る」ことに繋がっていくのです。

百年以上前に少年の生活の基本として提唱された『三能主義』は現代においても全く色褪せることはありません。それは、北米、欧米への二度に亘る遊学と東京巢鴨の家庭学校

での実践経験に裏打ちされたこの教えが明解で且つ少年達の本質を的確に捉えており、関係する人達に広く受け入れられたからでしょう。

そして私はこの「三つの能く」を子どもに求めればそれでよしとは考えていません。大人（職員）も一緒になってこれを行って初めてこの理念が意味を持つと思うのです。家族舎、小舎夫婦制という形態に代表されるよう

に、生活を共にするということは、一緒に能く働き、能く食べ、一つ屋根の下で一緒に能く眠るということです。この文章自体にそうした事への明確な言及はありませんが、「家庭学校」と名付けた幸助先生は、きつとそのように考えておられたに違いないと想像します。私達は共に実践することによって、いつも頑張っている子ども達の身近な理解者でありたいと思います。

もうすぐ今年度の「作業班学習発表会」があります。十五人の子ども達が職員と分校の先生達と共に汗して「能く働き」、その結果得られた成果を今年はどんな形で発表してくれるのか。楽しみにして待とうと思います。

研修旅行担当、施設での旅行を終えて

主幹竹中大幸

九月二九日から一〇月一日までの二泊三日
で予定どおり家庭学校・望の岡分校の研修旅
行が行われました。今年も昨年と同じコロナ
禍の中での旅行となり、いろいろな制限があ
りました。長く研修旅行の担当をしており毎
年苦勞しています。今年は特に大変でした。

道内の主要都市では新型コロナウイルス感染者が多く、当初から旅行先は富良野・旭川方面を予定していたので、ウイルス感染者が日増しに多くなってきている現状に不安を感じていました。

家庭学校の研修旅行は二泊のうち一泊は北海道の公共施設を利用するのが定番になっています。そこで道立青少年体験活動支援施設、

通称「ネイパル」を宿泊先として選んでいましたが直前になって、道内に九月いっぱいまで緊急事態宣言が発令されてしまいました。例年でさえ、児童の入所や退所で児童数がなかなか確定されなかつたり、研修旅行の内容や宿泊先や見学、体験先との調整、食事面でのアレルギー対応など、旅行会社の方には多大な苦勞をかけているのに、ここにきてそんな…という思いでした。

分校との共催で研修旅行を行っているものもあります。家庭学校は年間の行事がたくさんあるので、日程をずらして行うということには難しいということでした。担当者としては、子どもが一番楽しみにしている行事と言っても過言ではない研修旅行を中止という選択は、ぜったいにしたくないという思いでもあったので協議した結果、予定どおりに行うと決めました。

そこで問題になったのが、公共施設の閉館や休業でした。九月いっぱいということは、二九日と三〇日は選択肢が限られてしまうからです。

そんな中でも美術館ではアートに触れる機会があり、体験としては陶芸やガラス細工をして自ら物を作り、赤平市にある植松電機では社長さんの講演、ロケット作成など興味深いものばかりだったと思います。子どもにと

つてもよい経験になったと思います。

よい経験といえ、二日目に予定していた北海道グリーンランドでのアトラクション体験でしょう。昼食にバイキングを挟んで午前午後到大雨の中、合羽を着て遊びまわるという体験はなかなかできません、いや普通は遊ばないでしょう。そんな状況でも楽しんでくれるのが家庭学校の子どもです。雨に濡れながら談笑したり、笑い声が遠くからでも聞こ

えてきました。なぜ分かるのか、それは私たちしか園内にはいなかっただからです。大雨ですから。

旅行中には様々な場面で公共でのマナーな
ど気になる点は多々ありましたが、ケガなく
無事に戻ってこられたことは幸いでした。旅
行担当者としてはほっとしたところでもあり
ます。

兎にも角にも一番の旅行の目的は子どもが楽

しめることだと思っ
ています。ですから
これからも、もし研
修旅行に携わるの
であればそのこと
を一番に考えてい
きたいと思いま
す。

最後に旅行会社の
担当の方、施設・
分校教職員のみ
なさん、大変お疲
れさまでした。と
同時にありがとう
ございました。

中卒クラスのこと

児童自立支援専門員木元勤

二〇一一年四月から中卒クラスを担当し一年目になりました。三三名の中卒生と、現在も使われている教室で同じ時を過ごしたことを思うと感慨深いものがあります。最大で九名（二〇一一年）、ここ四年間は一名で推移しています。

偶然にも、昨年度から望の岡分校へ教頭先生として赴任してきた吉村先生とはとても懐かしい思いで再会しました。割とヤンチャな子どもたちを相手に悪戦苦闘していたときに、悩みを聞いてくれたり、励ましてくれたり、音楽発表会の際には、ギターの指導を手伝ってくれたりしました。昨年の音楽発表会では、聞いたこともなかった「あいみよん」の楽曲をやりたいと楽器の経験もないWKが言い出

し、必死に練習を重ねていた時も、キーボードを二台にし、置き方のアドバイスもくれ、本番当日感動の演奏ができました。今年のMTとは何をやろうか悩んでいます。決まったらまた助けてくれることと思います。よろしくお願いします。

中卒クラスのカリキュラムは、一言で表すと「自由」。人は、それぞれが個性を持っています。一人ひとりが違います。ここ四年は、

前述の通り一名のクラス。それぞれが、それぞれの個性と目標を持ち、進路も違えば家庭環境も違い、育てられ方も違います。その中で折り合いをつけ、子どもにマツチした授業カリキュラムを考え運営していくことが中卒担当の面白さだと思ってきました。家庭学校の真骨頂がここにあると思います。押し付けられることはないが、何がこの子に合った授業になるかを考えなければいけない。「自由」

にできるということは、「考え」を持ちながら進めなければならぬことだと思えます。

今年の中卒の授業の一週間を紹介します。

(一〇／一八(月)～二二(金))

一
一
○

一
一
一

一
一
一
一

一
八

一
九

理
科

書
道

理
科

ワ
ー
プ
ロ

総
合

数
学

体
育

一

二

数学

漢
検

英
語

国
語

三

英語

環境整備

総合

社会

総合

四

体育

作業班

環境整備

作業班

五

作業班

今年の中卒生は、勉強好き(?)な全日制高校への進学を希望する生徒なので、公立高校入試受験を前提に主要五科目を多くしています。特長的なのは、金曜日の「書道」「国語」「社会」です。通常は「書道」は二時間です。栄和子先生が担当してくれています。書に造詣が深く、生徒の未知な才能を導き出してくれる先生です。褒めることが実に巧み

で、実は、自分も参考にさせて頂いています。毎年、条幅で「この子がこんな作品を！」

「こんなダイナミックな字を！」と驚くばかりです。教室の前の廊下に張り出しています。学校を訪れるお客様にも見ていただき、感動のお言葉をいただいています。

もう一つの特長は、「総合」の時間。苦肉の時間割ですが、時に草刈り、時に音楽練習、時に学力テスト（漢検・ワープロ検定）の対

策等々に使います。一〇／二〇・二一は、両日雨が降り続き、屋外での作業は無理だと判断し、礼拝堂の車止めのペンキ塗りとスノーポールの準備をしました。雨の中、外にあるこれらを中卒教室に運び込みました。MTは文句も言わず、雨中の作業を、こちらの指示に「ハイ！」と動いてくれます。春、入校当初、山林班の間伐材（トドマツ）を有効利用しようとして、皮をはぎ、ガスバーナーで焼き入

れをし、二人で作り上げたものでした。数か月が経ち、風雨にさらされて色もあせてきたため、ペンキ塗装しようと考えていたものです。入校したての春先、その作業時、職員の大里先生がさりげなく「作業、楽しい？大変？」と訊いてくれました。彼の答えは「どちらでもない。」でした。こちらは、多分作業はそれほど好きではないだろうと判断しました。でも、二学期に入ってから、同じ質問をする

と「今、ここでしか経験できないような作業をしたいと思います。作業をしましょう。」と殊勝なことを言ってきました。その日の天候を見て「雨が降りそうなので一・二校時と入れ替えで作業を早めに行きましょう。」とも言ってくるときもあります。

最後に「体育」です。一昨年の子は、体を動かすことにあまり興味がなく、苦手だったため「体育」は入れませんでした。昨年は、

勉強よりも体を動かす方が得意の子だったの
で、週二回は入っていました。ただ、ほとん
ど二人きりで卓球をしたり、フットサルのボー
ルを蹴ったり、グラウンドでキャッチボールを
したりしていました。一度、清澤校長先生が、
体育館に来てくれて一緒に卓球をしたことも
ありました。とても上手で、いつもは私相手
になめてかかっていたWKもタジタジでした。
栄先生も何回か付き合ってくれました。今年

は、分校の体育担当の浅井先生が、声をかけてくださり、分校全体の授業に参加させてもらっています。今はバレーボールを基本からみっちり練習しています。バレーボールの現役選手でもある吉田先生の指導を受けているMTは実に楽しそうです。有難いことです。感謝です。このことは、ことあるごとに伝えていくつもりですが、彼の心の中に沁みこんでくれているといいなと思っています。

今回は、中卒教室の紹介を兼ねて、長々と取り留めのないことを書きました。話にお付き合いいただいたきありがとうございました。また、機会がありましたら、卒業した子どもたちの思い出や現況を報告したいと思います。

へ児童の声へ

石上館中二ニ・石上館中二ス

「園遊会を終えて」

石上館中二ニ

僕は今回の園遊会で感じたこと、学んだことがあります。最初は準備が大変なこと、そ

して大切さです。準備は、僕も手伝いました
がやっついていて感じたのが大変の一言です。今
回石上館では焼き鳥とスイートパンプキンを
提供しましたが難しかったのが焼き鳥を串に
刺すのとスイートパンプキンにカボチャの種
をのせることです。串に刺すのは、鶏肉が崩
れてしまったり、向きが逆になったりしてし
まい、何回も刺し直したりしました。カボチ
ヤの種は見た目を特に重視して取り組みまし

た。全ての見た目が一緒よりもそれぞれ違つた形でやってみても見た目がさらに良くなると思ひ、いろいろ工夫しました。このことを通して、当日を楽しく、おいしく食べてもらうためには、前からの準備が欠かせないこと、そしてみんなでの協力性と協調性が大切だと学びました。

次に当日での事について話します。今回の園遊会は、外部からのお客さんがいませんで

したがその中での実施となりました。しかし、できることに感謝したいです。さらに、屋台もたくさんあり、毎年の物や今年初めての物などいろいろいといただきました。メインからデザートまであり、おなががいっぱいになるまで食べ、幸せな時間でした。

今年は珍しい屋台もあり、くじ引きがありました。一等からはずれまであり当たれば景品が実際にもらえるという物でした。僕は、

一等は当てられませんでしたが楽しかったです。

最後に今回はとてもおいしいそれぞれの自信作が出ていました。また楽しかったので、来年もいたら、またやりたいです。そしてみんなとの協力すること、楽しむことを学んだ時間でした。

「気球に乗れる体験が出来て」

石上館中二S

一〇月一〇日(日)の朝、家庭学校のみんなと公園に行き、見るのは初めてではありませんが、生まれて初めて気球に乗ることが出来ました。

石上館の数名と先生と一緒に気球の近くに行き、乗り込む前は本当にこれが空に上がるのか不安な気持ちになりましたが、いざゴン

ドラに乗って少しずつ上がっていくとき本当に空に向かってしていると実感できました。

どんどん上がって行くときにものすごいガスの音がしてから熱い空気が先生の頭の近くで吹き出し、先生はビツクリしていました。

すぐに先生がしやがんでしまったので、景色がよく見えるようになったのですが意外に高く上がっていたので少し怖くなって、ゴンドラの横についている手すりをつかんでしまい

ました。足もガクガクしている時に景色がよく見えるからと先生が僕の腰をゴンドラのはじめにいくよう押してくれました。でも体は動けなくなっていたので変な声を出してしまいました。みんなに笑われてしまいました。多分それが一番高く上がった時でした。そこからはただん下に降りてきたんですが、少し冷静になれて景色がわかるようになりました。球場で野球をしている人が小さく見えたり、山のほ

うを見たら何かわからない建物が見えたり、川が見えたりしました。気が付いたら下で待っている次に乗る石上館のみんなの姿が見えました。みんな手を振っていたので僕も手を振り返りました。一緒に乗っていたみんなはなんだーもう終わりかと言っていました。そうじゃなく僕はけっこう長い時間に感じがして、そうじゃないかと考えていました。

着地してから思ったことは少し怖いけど絶

対にもう一回乗りたいなあと思いました。多分、この先なかなか乗れることはないけれど別なところでやっていたら、一人でもよいから気球に乗ってみたいです。